

第4節 「SG探究」（2単位）

1-1 目的

グローバル課題についての課題研究を通して、グローバルリーダーとして必要な課題設定力や解決力を涵養する。実験・体験を重視するとともに、科学的方法に基づいた協働による文理融合の研究となるように、文理の枠を越えた探究活動を通して論理的思考力・表現力や情報収集・分析力を養う。また、研究成果の発表を通して、プレゼンテーションスキルに磨きをかける。

1-2 内容と方法

(1) 授業方法

ア：人間の活動と生態系の調和について理解する（文理融合プログラム）

3月に国連大学やJICA等の研修を通して、SDGsに関する理解を深め、課題研究のテーマ設定につなげた。さらに、7月にはSDGsに関する特別講義を通して、生物学の視点も踏まえながら、私たち人間がどのように行動を起こしたらよいのかを考える機会を設けた。また、1年を通じて文理にまたがる様々な課題に対して研究に取り組む授業を行った。

イ：京都大学、東京外国語大学、石川県内の大学と連携を行う

6月に思修館（京都大学大学院総合生存学館）を訪問し、課題研究のテーマ設定に関して大学院生から助言をいただいた。11月には、中間発表の機会に、金沢大学の大学院生による課題研究の指導・助言をいただいた。東京外国語大学からは留学生を派遣していただき、課題研究について意見をもらう機会を設けた。

ウ：グローバル企業による指導・助言を受ける

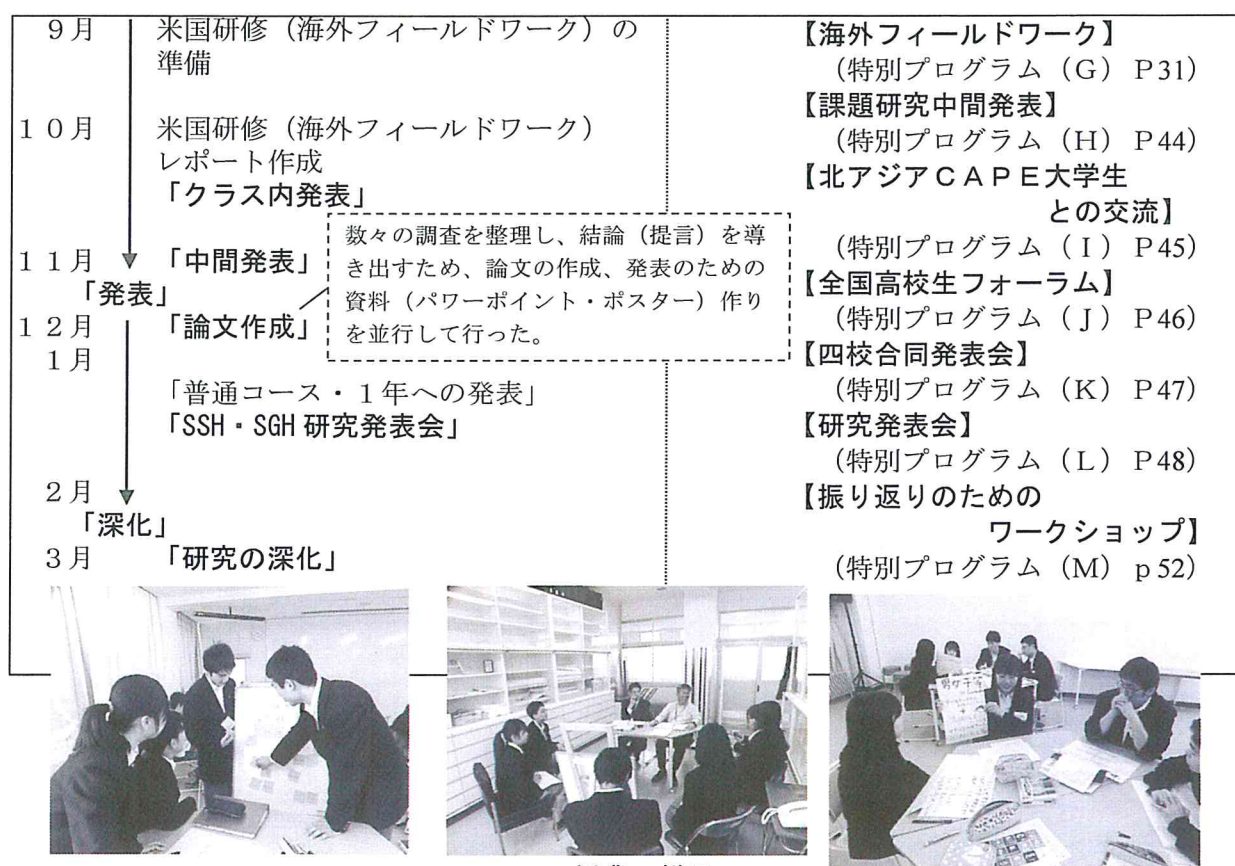
連携先であるコマツによる特別講義を2月に実施した。また、11月の特別企画である「社会人と語る会」において、各職種・業種で活躍する卒業生12名からグローバル社会との関係を踏まえて、高校生への問いかけを行ってもらうワークショップを実施した。

エ：社会人から問題解決力を学ぶ

前述の「コマツ特別講義」「社会人と語る会」でのワークショップの他、研究発表会においても、企業人から研究に関する助言をいただく機会をもった。

(2) 実施内容（課題研究指導の流れ）

〈授業内容〉		〈特別プログラム〉	
3月		【国連大学訪問研修】 (特別プログラム (A) P23)	
4月	「課題設定」 各自の興味関心に即した課題を設定 グループ決め リサーチクエスチョン、仮説の設定 研究計画案づくり	テーマ設定の際、春休み課題として読んできた新書から、興味のある分野を選択。その後、テーマからより具体性の高いリサーチクエスチョンを設定。それに対する現時点での自分たちの答えを仮説とする	
5月			
6月	「調査」 リサーチクエスチョン・仮説・ 研究計画の修正	【思修館訪問研修】 (特別プログラム (B) P24) 【おもてなしプロジェクト】 (特別プログラム (C) P25) 【エンパワメント (P I I)】 (特別プログラム (D) P26) 【イオン1%クラブアジアユースリーダーズ】 (特別プログラム (E) P27) 【全国高校生SRサミット】 (特別プログラム (F) P29)	
7月	国内フィールドワーク計画 各グループごとに調査		



2. 成果と課題

▲授業の様子

SG探究は、課題研究を軸としたプロジェクト型学習の形をとって授業を進めている。探究課題はグローバル課題としているが、SDGsを切り口とした社会問題に焦点をあてたことにより、グローバルでありながら地域に根差したローカル課題としても捉えることができるようになり、より一層、社会課題の解決といった現実問題に結びつける研究になった。

問題解決を目指して社会に貢献するグローバルリーダーとなるためには、文系・理系を問わず、両方の発想が必要であり、様々な考え方を持った人が協働してプロジェクトを遂行する力が求められている。そのため本校では、「文理融合」の理念のもと、SGコースでは必ず文系・理系両方の生徒が混在するグループを編成させ、協働で研究を進めることを実践している。社会問題をテーマとする研究では、自ずと社会科学的なアプローチが中心となるが、昨年度以来、実験や観察を研究手法に取り入れることを推奨した結果、複数のグループではそうしたアプローチを含む研究が見られるようになったことは、変化の一つと言えよう。

全体的なスケジュールについては、この2年間で基本的には同様であり、すべては1月の研究発表会に向けて4月からテーマ設定、リサーチ・クエスチョンと仮説の設定、フィールドワークを踏まえたリサーチ、中間発表と助言に基づく修正という形を踏襲してきた。教員がどの時期に、どのように、何を働きかけるのかは、これまでの経験の蓄積があり、ある程度見通しをもって指導することができた。また、SGコース3期生は、2期生の研究発表を見たこともあり、その到達点やプロセス・ノウハウを知的財産として活用することができたことも、大きなアドバンテージとなった。

一方で、SGコース3期生には、これまで他人ごとのように感じるような提案になってしまいがちであった反省から、できるだけ自分たちによる「実践」を伴った提案を目指させるよう促した。そのため、研究が自分ごととして現実社会につながるものとなった反面、今まで以上に壁にぶつかり、試行錯誤を繰り返すこととなった。答えのない問題に、多くの生徒が粘り強く取り組む姿に、この授業の意義を強く感じる。

第4節 「SG探究」

【特別プログラム】(A) 関東フィールドワーク (国連大学訪問研修)

1. 実施概要

○目的：2年次の課題研究に向けて、連携先の国連大学からグローバル課題について講義を受けることで、研究テーマの内容や調査方法を学び、課題設定のヒントを見つける機会とする。

○日時：平成31年3月25日(月)～26日(火) 1泊2日

○対象：SGコース内定者41名

○日程：1日目 国際連合大学での講義

国連大学広報センター(UNIC)・国連大学サステナビリティ高等研究所(IAS)

2日目 コース別研修

プラン・インターナショナル：子ども・女性問題についての講義

国際協力機構JICA地球ひろば：SDGs、国際貢献の意義についての講義

野村総合研究所：途上国におけるインフラ整備についての講義

2. 生徒の感想

▶今回の研修でSDGsについて再考することができた。高校で一年間SDGsについて学んできたつもりだが、知らないことがたくさんあった。また、それぞれの機関で捉え方に違いがあり、多角的に見ることができた。この研修では何人もの方から話を聞いたが、共通していたのは「学び続ける姿勢」だ。就職しても常に悩みながら学んでいくことは、現代の社会において最も大切だと思った。現状に満足せず、何かアクションを起こすことで新たな道もひらける。今まで問題ばかりに目を向けてきたが、今までに先人が問題解決を成功させてきた事例があることも気づいた。

▶この研修を通して、自分の社会問題や世界についての知識がまだまだ浅く、これからもっと知るべきことや調べなければならないことが多くあるということに気づきました。1日目の国連大学訪問での講義や2日目のプラン・インターナショナル、JICAでの講義を受け、世界全体で起こる問題について様々な方面から自分に出来ることを探し実践している人、命を懸けて研究している人がいることを知り、私も世界中の人々のために全力を尽くしたいと改めて強く思いました。

▶プラン・インターナショナルでは女性や子供の教育や不平等について聞き、全てを解決するカギは女の子も含めた子供全員の教育にあることを知り、改めて教育の重要性を感じた。SDGsも、全ての人に教育が提供されることで達成にぐっと近づけることに気づいた。

▶主にSDGsの問題は一人一人の小さなアクションで変わると言うが、実際にそれに気づいているのは、それらを問題視し、研究している人たちだけなのだと改めて感じた。根本的な世界的問題や途上国の開発は私たちの想像以上にさまざまなところで繋がっていて、どの入り口からでもその問題を実感したり解決したりできると思った。また、それぞれの国にはいろいろな背景があると情報はあっても実際に現地に行ってからこそでないと学ぶことができないこともあると今回感じた。その面をどう配慮してうまく他国との関係性を保ちつつ、持続可能な開発・発展を維持するかは難しい問題だと知った。ベストな選択はそれぞれの立場や時代によっても変わるし、それらへの対応を考えなければ持続可能であるとは言いがたいが、そのようなアイデアを考えるのも大変だと思う。だからこそ、より多くの人で問題を共有し、さまざまな面から考える必要があると考えられるので、早い段階で社会問題をみんなで知ることが大切だと思った。



3. 成果

1年次にSDGsを切り口としてグローバル課題について学んできた生徒たちが皆、自分たちが知っているつもりで全然わかっていなかったと実感したようである。実際にグローバル課題の解決に取り組んでいるロールモデルから話を聞くことができたことは、改めてグローバル・リーダーを目指す志や課題研究に向かう意欲を高める機会として意味を持ったと確信できる。

第4節 「SG探究」

【特別プログラム】(B) 京都大学大学院総合生存学館（思修館）訪問研修

1. 実施概要

- 目的：課題研究のテーマ設定や研究計画について、大学院生から助言を得るとともに、目指すべきロールモデルに触れ、リーダー・研究者としてのあり方を学ぶ。
- 日時：令和元年6月15日（土）7：00～19：30
- 場所：京都大学大学院総合生存学館（思修館）
（京都市左京区吉田中阿達町）
- 内容：本校2年SGコース生徒（41名）が、思修館を訪問し、グループ別に課題研究のテーマ設定のあり方や方向性、研究手法等について助言を受ける。



2. 生徒の感想

- ▶お話をしていくなかで、まず思ったのは自分たちの研究に対するつめの甘さだ。仮説から本当に社会問題の解決につながるのか。そこが、うまくいっていないと分かった。一緒に考えていくなかで、新たな研究の方向性へとつながった。
- ▶院生の方は、自分たちにはなかった視点からの的確なアドバイスを分かりやすく伝えてくれて、かっこいいなあと思いました。自分の意見をしっかり持っていたり、年下である高校生の意見にも熱心に耳を傾けてくれて、学ぶ姿勢とはどういうものか教えられました。本当にかっこよくて、自分もそうなりたと思いました。研究の修正点が見つかり、また自分の理想像も明確になったので、自分にとってこれ以上ないくらい良い経験でした。
- ▶思修館でのアドバイスを受けて、自分たちの研究がかなり抽象的なものだと感じました。実際に研究を集めている人たちは視点が違うなと思いました。アンケート調査もなんとなく考えていたけど、アドバイスを受けてより研究を効果的にできるアンケートが作れそうです。
- ▶本当に貴重な意見がたくさん得られました。研究の進め方、目標と目的の違い、「巨人の肩の上に立つこと」など参考になったことが多くありましたが、その中でも特に目標を達成していった先に何が見えてくるのか予測し、目的にたどり着けるようにすることが肝心だというアドバイスが今の自分たちに抜けていることだと理解しました。
- ▶修士の方々の知識の深さと広さ、コミュニケーション能力など全ての面に驚かされ、かつ将来このような人になりグローバル問題を考えたいと切望した。この感動は使い知っている言葉では表せない。
- ▶自分たちで考えていた方法以外の研究の意義や課題研究したい理由、つまり課題を解決することが社会問題の是正にどうつながるのかをしっかりと考えるべきだと指摘され、次からは先行研究や現場の声を利用し、そのあたりを考えるとよいとアドバイスされ納得した。



3. 成果

豊富な知見と視座を兼ね備えている大学院生と議論する中で、生徒たちはどのように研究を進めべきなのかといった手法だけではなく、問題解決に向けてどのような姿勢で取り組むべきかを学ぶ機会となった。課題研究のテーマ設定を行う段階で、自分達の研究が意味のあるものであるのか、その手法は適切なのかといったことを確認し、方向性を定めるためには、大変有効なプログラムであると確信している。また、今回はSGコース1期生（卒業生）がサポートに入ってくれたことで、生徒にとって目指すべきロールモデルとの出会いをさらに確保できたことが大きな収穫である。

「SG探究」

【特別プログラム】(C) おもてなしプロジェクト



1. 実施概要

○目的：外国人に金沢を紹介するためのプラン作りを通して、郷土や日本文化について理解を深めるとともに、異文化理解のための視点を身につける機会とすることで、グローバルリーダーとして必要な資質を磨く。

○日時：令和元年6月8日（土）2・3限

○内容：【プランニングのためのワークショップ】

アドバイザー：宮本貴正氏（(株) 日本旅行）

9：20～ 9：35 講義「インバウンドと観光プランづくりについて」

9：35～10：40 各グループで観光プランづくり

10：40～11：05 プレゼンテーション

11：05～11：10 講評

作成した8プランを翌週の英語の授業で英訳

【留学生への提案】東京外国語大学留学生4名がそれぞれ選択

【ガイドの実践】7月13日（土）9:00～12:00

ガイド担当生徒（有志を募集）により、採用プランに基づき実際に案内

2. 生徒の感想

【観光プランづくり】

▶私たち日本人は非日常を求め観光では普段しないことを体験したがるけど、外国人観光客にとっては、私たちの普段の生活が非日常で、文化で、それを求めてやってきているんだと視点の違いに気づかされました。

▶人に何かを提案するときは、アイデアだったりプレゼン力だったり、工夫がいるんだということが分かった。相手の目線に立って考えることが一番大切で、でも一番難しいということにも気づけた。自分はまだまだ金沢を知らないんだ！と思った。

【おもてなしガイド】

▶本当に楽しく、感動の連続でした。英語でガイドをしてみて、改めて金沢の魅力を再発見できたとともに、普段学んでいる英語を実際に活用できたことで、とても自信もつきました。しかしとっさに気の利いた言葉が出てこず、もどかしさも感じました。今日のような機会を利用し、どんどん英語を使うことでより相手の気持ちを理解して英語を話せるようになりたいです。

▶金沢を観光客の目線で見ると、知らないことがたくさんあったということに気づけたので、金沢についても知りたいと思いました。



3. 成果

グローバルリーダーは、さまざまな視点で物事を見ることや考えることが重要である。それは、自分たちとは異なる文化やものの考え方に想像力を働かせることや、実際に外国人からフィードバックを得ることで培われてくる。生徒の感想からは、その目的が達成されたことがうかがえる。また、コミュニケーションツールとしての実践的な英語力を身に着けたいと本気で感じるためには、こうした経験がとても有効であることも再確認できた。

○第4節 「SG探究」

【特別プログラム】(F) エンパワメント(成果発表会後の留学生との交流)

1. 実施概要

○目的：成果発表会参加の留学生との意見交換や議論を通して、研究の内容を深めるとともに、実践的な英語力も育む機会とする。(「SGH構想調書」のエンパワメントプログラムAに該当)

○日時：令和元年7月12日(金) 15:10～16:05

○対象：2年SGコース41名、東京外国語大学留学生4名、金沢大学留学生12名

○内容：①アイスブレイキング (Human Bingo)

②”The Outline of Our Project”・課題研究概要のプレゼン+質疑応答
(12分×3セッション)

2. 生徒の感想

▶英語で課題研究について話し合うというのは本当に難しかった。留学生の方々はたくさん話してくれたが、なかなか理解できず上手く返答できず、自分の英語力が非常に悔しかったのでアメリカ研修までには、普通に英語で話し合えるくらいの力をつけたいと思った。

▶外国人と直接話すのはALT以外では、ほぼはじめての経験だったので正直言って緊張した。しかし、実際に話してみると留学生の方たちは自分の拙い英語も熱心に聞いてくださり、コミュニケーションが成立していたので良かった。

▶はじめのアイスブレイクでは自分から積極的にコミュニケーションをとることができ、良かったです。自分が意外と自然に英語を話せていたことに少し成長を感じました。しかし、発表と話し合いの時は留学生の方の言っていることが分からないところが一部あり、まだ英語力が足りないなと思いました。

▶エンパワメントを通して、私たちの研究に対していろんな留学生からいろんな角度からのアドバイスをもらうことができたので、いい機会になったと思います。



▶日本以外の国に「野菜の規格」という概念がないことを知った。概念の有無により、話が伝わらなかったが、その後言い換えることで伝わったことが嬉しかった。

▶結構緊張したが、積極的に英語で話せて良かった。私たちの研究では、規格外野菜の廃棄をなくすため子ども食堂などの福祉施設に提供することを考えていたが、話した留学生は皆、規格外野菜をなんとかして売る方法を考えるべきだと言っていた。私たちとは違う視点の意見をもらえたので、これを参考に考え直したい。

3. 成果

積極的に英語を話す姿勢の大切さを再確認し、課題研究に関する意見交換を通して自分たちにはない視点やグローバルな視点から問題を捉えることの重要性を体感させることができた。また、自らの英語力について、伝えたいことが言えないもどかしさを感じたことから、英語力の必要性を痛感した生徒も多く、海外研修に向けて課題研究の内容の深化だけでなく、実践的な英語力の向上にも意欲的に取り組もうとする姿勢が醸成されたようである。

第4節 「SG探究」

【特別プログラム】(E) イオン1%クラブアジアユースリーダーズ2019

1. 実施概要

○目的：アジア9カ国の生徒が一堂に会し、「ベトナムにおける食生活の考察と改善点の提案」というテーマについて、英語でディスカッションを行う。この議論を通して、異なるバックグラウンドを持つ学生たちが、グローバル感覚や互いの価値観への理解を深める。

○主催：イオンワンパーセントクラブ

○日時：令和元年8月18日（日）～8月23日（金）

○会場：ホテル・メリアハノイ（ベトナム社会主義共和国・ハノイ市内）

○参加者：2年SGコースより4名参加

○参加国：日本・中国・ベトナム・インドネシア・マレーシア・タイ・カンボジア・ミャンマー・ラオス

※ 本校以外に日本からは「北海道登別明日高校」「秋田南高校」「お茶の水女子大学附属高校」「渋谷教育学園幕張高校」「関西学院千里国際高校」「立命館守山高校」「神戸市立葺合高校」「広島大学附属福山高校」の8校が参加

○テーマ：食育 第3弾 (Dietary Education Third Round)
「ベトナムにおける食生活の考察と改善点の提案」

○日程：

日付	時間	内容
8月18日 (日)	10:00 - 11:30	オリエンテーション
	13:00 - 15:00	講義① Probiotics and your health (ヤクルト)
	17:00 - 19:00	歓迎会
8月19日 (月)	8:00 - 9:00	講義② Nutrition revolution in VN (ダノン)
	9:45 - 10:00	講義③ Issues in terms of food & health and eating habits (農業省)
	10:00 - 11:00	講義④ Establishment of nutrition system in VN (栄養研究所)
	11:00 - 11:30	グループディスカッション
	13:30 - 17:00	味の素ハノイ訪問 講義・見学・ベトナム料理実習
	18:00 - 19:30	夕食 (インドネシア料理レストラン)
8月20日 (火)	9:00 - 10:20	講義⑤ Food, Eating habits and their linkage with health (国立農業大学)
	10:00 - 10:50	講義⑥ Food and health - Food safety (健康省)
	15:00 - 17:00	国立農業大学訪問 講義⑦・見学ツアー
	18:00	夕食 (インド料理レストラン)
8月21日 (水)	9:00 - 16:00	イオンモール Long Bien 訪問 講義⑧後、チームごとにインタビュー
	18:00 - 19:00	夕食 (フレンチレストラン)
8月22日 (木)	終日グループディスカッション プレゼンテーション準備	
8月23日 (金)	8:00 - 15:00	開会式・各チームのプレゼンテーション
	18:00 - 20:00	授賞式・夕食

2. 生徒の感想

▶私のチームは、最初は揉め事の連続でした。「今日は疲れたから」というリーダーの一声で夜のミーティングがなくなり、焦った日本人4人が深夜まで作業をする羽目になったり、朝食の時間に話し合おうと提案しても誰も来なかったり、正直いらだつ場面もありました。しかも、日本人4人も決して英語が上手いというわけではなく、文化の違いもあったため、外国人生徒たちとの意思疎通が思うように出来ずもどかしく感じました。しかし、私たちは最終日のプレゼンテーションでなんと1位という快挙を成し遂げることができました。それはなぜでしょうか。答えは「言語や文化の障壁があってもめげずに議論し続けたから」です。ディスカッションでは、当然異なる意見を持つ人達が衝突する場面が出てきます。私のように押しが弱いと、つい尻込みして相手に意見を譲ってしまいがちです。しかし、私のチームメイトの日本人達は自分の意見をしっかり持っており、それを主張すべく流暢な英語を巧みに操る外国人相手にもはっきりと“NO!”と言える人達でした。その結果、口論にはなったけれど、次第に相手が自分達の意見を尊重してくれるようになり、最終的には話し合いの内容が深まり、優れたプレゼンテーションに仕上がりました。また、私も彼ら、彼女らのように文化や言語の垣根を越えて議論できるようになりたいという良い刺激を受けました。



▶この経験は僕に非常に大きな影響を与えてくれ、素直に「楽しかった」などの言葉では表現しきれないものであった。まず、レジリエンスの重要性をひしひしと感じた。周囲の人の英語力への驚きと自分の著しい英語力の欠如、訛っているという状況ゆえ、当初は「帰国したい」という思いがあった。しかし落ち着き、今回の自分の目的や今まで積み上げてきた事を思い出し、最終的には楽しむことができた。しかし、一貫して己の英語力には嫌気がさし、そして英語力向上により熱が入った。どれだけ良い案があっても英語力なしでは上手く伝えられないのだ。今日のプロジェクトにより国際的な活動を切望するようになったので日々頑張りたい。また、新しい友人との出会いも大きいものであった。全く違う環境で育ったものの、同じ方向を向いて協力している一体感はたとえようがないように素晴らしいし、良い刺激をもらった。今後もその関係を大切に将来必ずまた会って語りあいたいと思う。



▶自分の英語力のなさを恨めしく思っている。標準並みに英語はできるつもりでいたが、アジアの日本以外の国から参加した生徒たちは、息をするように、実際には息継ぎを二、三度はさみながら、第二言語を流暢に話していて、圧倒されてしまった。せっかく仲良くなっても英会話の力不足から聞き返すことが多々あるため、会話が途切れてしまう。また、語彙力の無さも非常に悔しく感じる場所がある。要するに、自分の英語はコミュニケーションをとるには不足していた。しかし、他の国の生徒は勢いよく英語を話す、アイディアは突飛であったり、秀逸であったりというわけではなかった。私個人の感想では、日本人参加者の方が論理的に考えて、有効なアイディアを出しているように思えた。話す勢いで押し切られているような気がした。スラスラ話せる、使える英単語をもっと増やす必要があると思った。



3. 成果

ある程度覚悟はしていたけれども、違う文化背景を持つグループの中に放り込まれた本校の生徒たちが感じた衝撃は大きく、最初の数日は落ち込んでいた。自分の意見がないわけではないのに、きちんと最後まで伝えられる英語力がない。グループ全員に注意を払い、それぞれに役割を与えてくれるリーダーとは限らない。自らグループ内での役割を探し出し、動いていかなければならないという状況は辛かったようだ。だが、それでもこの1週間で確実に生徒たちは成長していった。自分で考えて動く、人の意見に耳を傾ける、最後まであきらめない、など今後の学校生活や社会においても大切なことを学んだと言える。もっと多くの生徒が自分を外から見つめ、どうあるべきかを考える機会を持つことができるように努力していきたい。

第4節 「SG探究」

【特別プログラム】(F) 全国高校生SRサミット

1. 実施概要

- 目的：①他校の高校生及びAPU学生と、SDGsに関わる各校のプロジェクトの課題について協働で取り組み、その解決策を検討することを通して、互いに学び高め合う機会とする。
- ②生徒が社会の一員として目指す社会について考え、どのように社会貢献できるか考える機会とする。
- ③教員もこのフォームへの参加を通して、互いの取り組みについて共有し学びあう機会とし、今後も学校での取り組みを継続的に発展させるための方策を模索する。
- ④産学協働プロジェクトに発展させるべく、今回の繋がりをさらに発展させる契機とする。
- 主催：立命館宇治高等学校
- 日時：令和元年7月30日(火)～8月1日(木)2泊3日
- 会場：立命館宇治中学校・高等学校(7/30)
立命館大学びわこ・くさつキャンパス(7/31・8/1)
- 参加者：2年SGコースより4名参加
- 日程：令和元年7月30日(土)～8月1日(木)

7/30(火)	13:00	開会式・各校からプロジェクト紹介
	15:45	フィールドトリップ
	20:30	発表準備
7/31(水)	9:00	未来ワーク IC ネット 日暮氏によるワークショップ
	13:00	発表準備
8/1(木)	8:30	最終日流れ説明
	9:00	発表準備
	10:00	各グループ発表
	13:00	各会場の優秀チーム発表
	14:05	企業担当者よりフィードバック
	14:20	Next Action 宣言
	14:35	閉会 挨拶

2. 生徒の感想

▶私はとにかく楽しめた3日間だったと思います。1日で12時間以上、ひたすら班で話し合いました。今までこんなに長く1つのことについて考えたことがなかったので、もちろん疲れたけど、1度も嫌にはなりませんでした。班の人は誰も「やめよう」と言いませんでした。それは気遣いで言わないとかじゃなくて、前向きでやる気があったからに見えました。班の人は「好きなものが同じ」とか共通点があった集まりではないし、たった3日間だったのにとっても仲良くなりました。1つの同じ「GOAL」があれば何日一緒にいるかなんて関係ないと思いました。「高校生だから難しい」と思えば「大学生だから難しい」「社会人3年目だから難しい」「家族がいるから難しい」といいわけを使ってしまうので、そんないいわけはいらないと思い知らされました。



▶この SR サミットに参加するまで、自分たちの探究活動は比較的進んでいるほうだと思っていました。しかし、1 日目各学校のプロジェクト紹介では、海外でもうすでに活動していたり、活動のための団体を持っていたりと広く進んでいた学校ばかりで驚きっぱなしでした。また、パワーポイントの作成は普段からたくさんしているらしく、私たちとの力の差を感じました。けれども、探究でのディスカッションに取り組む姿勢がいいと、他校のグループ仲間に言ってもらえました。これらを考えると、私たちは伝えるための力がまだまだ弱いのだと思いました。学校に戻っても自分のグループについてだけでなく、他のグループにも今回サミットで得たことを広めて、今回できたつながりが無駄になることのないように実現へと進めていきたいと思っています。



▶このプログラムが始まる前、期待半分、不安半分でした。しかし、終わってみて、期待していた 2 倍、3 倍も充実したプログラムになったと思いました。その理由として 1 つ目は、たくさんの自分達と同じ志を持つ人に出会えたからです。彼らの実行力にはとても刺激を受けたので、私たちも失敗を恐れずに“やってみる”ことを心がけようと思いました。また、彼らの上手かつ早いスライド作りとプレゼン力は息を呑むものがありました。秘訣を聞くと、やはり場数を踏むことだそうです。2 つ目の理由は初めてのチームで協力してプレゼンをやり切れたことです。班の仲間はみんな気さくで優しく、1 日目から打ち解けることができました。時間が無かったので大半の作業を分担しましたが、最初の目標設定を入念に行ったため、共通意識をもって効率的に作業できました。本番は 2 日間やってきたことを自信にしてやり切りました。班の仲間には本当に感謝しかありません。今回初めて、初対面の人と課題研究をして、全員が課題に対して本気になることと、目標などの土台をしっかりと共有することが大切だと感じました。このプログラムで得た経験を活かして、SG 探究では特に実行することを意識して頑張ります。



▶＜議論し続けた 1 日＞寝不足、糖分不足になるほど、1 日中頭を使った。みんな回転のスピードがとても早いし、自分も休みなく考えられた。各学校で違いはあっても、「社会をよりよくしたい」という思いは同じだったからだ。
 ＜泉丘は遅れている＞パソコンがネット環境で使えなかったことはとても困った。他の人は一人一台パソコン・タブレットを持っていた。パワポを使って発表することにとっても慣れていて、泉丘の人が IT を使えなさ過ぎる、使う機会がないことを改めて認識した。探究の授業でも積極的に使っていきたいと思った。＜全国の友達＞AB 班は他の班よりも異常に仲が良かった。サミットが終わっても連絡をとり続けている。このような機会をいただけたことに感謝したい。

3. 成果

動画アプリを利用した事前打ち合わせから、本番の流れまで、とても効率的で、かつよく練られたプログラムであったと思う。全国から集まった様々な学校が考えてきたプロジェクトを、問題解決を図るためのワークショップや、APU の学生というメンターの助言などを通して、さらに有効な解決策へと高めていく過程は大変参考になった。短期間でも、ワークショップで新しい問題解決への手法を学び、メンターの的確な助言を受けながらどのチームも熱心に取り組んでいたのが印象的であった。メンターとしての APU の学生たちは、流暢な日本語を話し、チームの問題点を指摘するだけでなく、上手に生徒たちを盛り上げていた。このような大学生のサポートがあったおかげで、議論が十分に深まり新しい提言にまでつなげることができたのだと思う。本校の生徒たちは、他校の生徒から大いに刺激を受け、自分たちに足りない力を自覚し、今後探究を深めていくうえで大切なことを学んだと思う。

第4節 「SG探究」

【特別プログラム】(H) 海外フィールドワーク（米国研修）

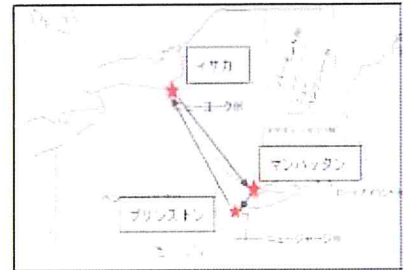
1. 実施概要

○目的：SGコースの生徒達が進めている課題研究の、研究テーマに関する調査を行うとともに、プリンストン大学やプリンストン高校の学生に対する発表や意見交換を通して、国際的な視点からさらに研究を深めることを目的とする。また、活動全般を通して、英語によるコミュニケーション能力を向上させ、国際人に必要な視野やものの見方を獲得し、国際社会で活躍できる生徒を育成することが目的である。

○日時：令和元年9月30日（月）～10月7日（月）

○対象：2年SGコース39名

○日程：



9/30（月）【移動／由水南氏のワークショップ】

学校集合→小松空港→羽田空港→JFK 空港→ニューヨーク市内着
→由水南氏のワークショップ→ニューヨーク市内泊

10/1（火）【ニューヨーク市内フィールドワーク、ツアー／ホームステイ】

ニューヨーク市内グループ別フィールドワーク

- ① セントラルパーク→ダコタハウス→ストロベリーフィールズ→地下鉄で移動→マディソンスクエアガーデン→エンパイアステートビル→国連本部
- ② ブロードウェイ→劇場街→タイムズスクエア→国連本部
- ③ トランプタワー→セントパトリック大聖堂→ロックフェラーセンター→グランドセントラル駅→国連本部→ウォールストリート研修→移動→プリンストン高校→ホストファミリーと対面、プリンストン高校日本語クラブ生徒との交流会→ホームステイ

10/2（水）【プリンストン高校／ホームステイ】

プリンストン高校授業参加→課題研究プレゼンテーション（英語）→ホームステイ

10/3（木）【プリンストン大学】

プリンストン大学着→開会式→学生によるキャンパスツアー→昼食交流会→日本語専攻生に課題研究プレゼンテーション（日本語）→移動→ニューヨーク市内泊

10/4（金）【国連職員、ユニセフ職員による講義／移動／コーネル大学】

国連職員、ユニセフ職員による講義→移動→コーネル大学到着、日本語選択の学生によるキャンパスツアー→グループ別に学生と夕食交流会→伊サカ泊

10/5（土）【エコビレッジ・伊サカ／移動】

レクチャー、ボランティア活動→住民と昼食交流会→課題研究に関する意見交換→移動→ニューヨーク市内泊

10/6（日）・7（月）【移動】

JFK 空港→羽田空港着→解団式→小松空港→学校着

2. 研修先および研究内容と成果

①由水南氏のワークショップ（9／30（月）午後 ニューヨーク）

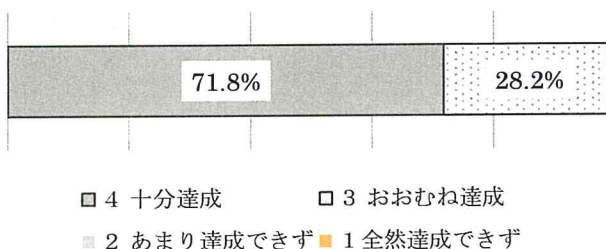
研修内容

・ニューヨークでミュージカルを中心に舞台俳優として活動している本校卒業生の由水南氏によるワークショップ「MY success NY セミナー」に参加し、演劇のエクササイズを利用して体と心を解放し、間違いを恐れずに積極的に英語でコミュニケーションを取る姿勢を促す。

ねらい（期待される効果）

- ①アメリカに着いた直後の緊張感を和らげ、初日から実践的な英語に触れることで、これまで学んできた英語が実際に使えるという自信を身に付け、二日目以降の研修に活かすことができる。
- ②現在 NY のブロードウェイで活躍している先輩から、グローバルに活躍することとはどういうことなのかを学び、グローバルリーダーを目指すために必要な資質を養う。

演劇ワークショップに参加して、英語でコミュニケーションをとる心構えを作る



（生徒感想文）（数字はねらいとの対応、以下同じ）

▶②由水さんの挑戦する心や諦めない心から、自分も何かに挑戦したいと思った。短い時間でのワークショップだったけれど、②由水さんの堂々とした姿や考え方に触れて、自分もそうなりたかったし、アメリカ研修で少しでも新しいことに自分から挑戦してみようと思った。ワークショップの中で英語を話すときには、①いつもより積極的にコミュニケーションをとることができ、少しミスしてしまったところもあったけれど、積極的になれた分、楽しさも大きかった。まだこれからコミュニケーションをとったり自分から行動するチャンスがあるので、その一つ一つで自分が後悔しないように、人と比べるのではなくて、①自分の限界を少しでも押し上げられたと思えるような有意義な研修にしていきたいです。



▶私がワークショップの中で特に印象に残ったお話は「常に自分がわくわくする選択をして生活をする」ということです。②自分に自信を持ち、前向きに何事にもチャレンジしていくためにも、自分の本当の感情、遠慮して自分の中にしまい込んでいる本当の思いを尊重することも大切だと学びました。そのような本当の自分を見失わないことが、大人になってもずっと強い意志を持ち続けて生きていくことにつながると思います。私も由水さんのような強い女性に近づけるようになりたいです。

（成果）

グローバルな社会で活躍する先輩、由水南氏との出会いにより、英語でコミュニケーションをとる際に大切なマインドセットについて学ぶことができ、同時にこれからの人生を生きていくうえで範とすべき考え方に触れ、強く感化されたワークショップとなったようである。

②プリンス頓高校（10/2（水）終日 プリンス頓）

研修内容

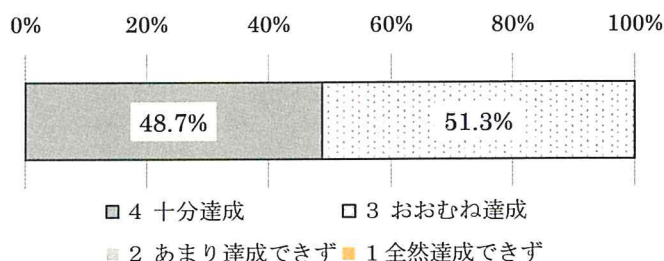
- ・プリンス頓高校にて、自分たちの課題研究の英語によるプレゼンテーションを実施し、同世代の高校生とディスカッションを行う。
- ・プリンス頓高校の学生の家ホームステイし、現地高校生と共に授業に参加することで、文化や教育の在り方についての日本との相違点を体感し、視野を広げる。

ねらい（期待される効果）

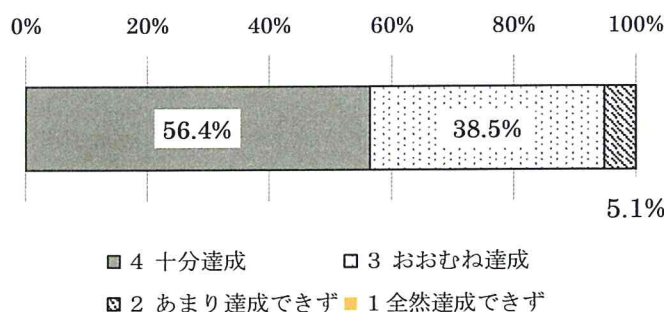
- ①米国の同世代の高校生の考え方や見方を知ること、課題研究の内容を深め、汎用性を持つものへと改善できる。
- ②ホストバディと過ごすことで、アメリカの学校生活を体験し、異文化理解を深める。
- ③英語を使う積極性と意欲、質問力が養われることで、将来リーダーとして活躍するための心構えを養う。



米国の同世代の高校生の考え方や見方を知ることで、課題研究の内容を深める



アメリカの授業を体験することで、文化や教育のあり方について日本との相違点を学ぶ



（生徒感想文）

▶②アメリカの授業を受けて、先生がほとんど手を出さずに、アドバイスをたまにするだけの状態にとても驚きました。生徒一人ひとりが自立していて、自分に必要なことを考えて行動しているように見えました。

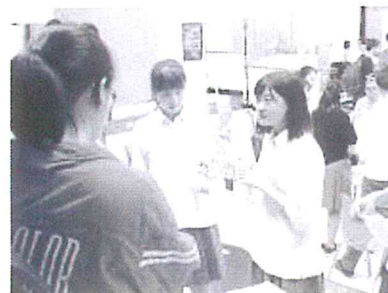
▶2時間半にわたるプレゼンテーションは、本当に大変でした。③最初はとても不安でしたが、回を重ねるごとに英語を自分のものにして、1つのツールとして使えるようになっていくのを実感しました。それがとてもうれしかったです。

▶アメリカの高校生が、授業中であてられていないにもかかわらず、自分の意見や疑問を口にしたりする様子を何度も見ました。②日本でこんなに能動的に授業を受けている人はあまり見られないと感じました。日本の高校生が見習うべきところをたくさん見つけることができました。

▶まず一番驚いたことは、②アメリカの授業は生徒の質問や考え方を基に構成されているということです。ほとんどすべての生徒が授業中に手をあげたり、意見交換をしたりしていたのすごいいいと思いました。

▶実際に米国の同世代の高校生に英語で発表するのはとても緊張し、一回目は身振り手振りであたふたしたまま終わってしまいました。しかし、①聞いてくれた米国の高校生からたくさんのアドバイスや良かった部分のコメントを頂くうちに改善すべき点が明確化し、とても参考になりました。特に英語の発音が難しくもっと練習が必要だと感じました。また米国の高校生がはっきりと自分の意見をいう姿を見て感激し、自分もああなりたいと強く思いました。

▶日本と違って、日本に取り入れたいなと思ったことは、③学生が積極的に挙手していることだ。先生が何か質問あるかと聞いたら、たくさんの生徒が質問していたのがすごいと思った。常に質問がないかどうか考えているというのはなかなかできないことだと思うので、私も真似したい。



▶プレゼンテーションは合計6回しましたが、③回を重ねるごとにプレゼンのやり方、アイコンタクトや話し方などが分かってきて、そのスキルがついたような気がしました。質疑応答の時に自分から相手に何回か質問ができたのでよかったです。また、その中でアメリカとの違いも分かり参考になりました。

▶①研究内容については、日本とアメリカの法律の有無などの状況の違いがはっきりしてきた。仮に私たちのアイデアがうまくいったとして、それがグローバルな展開にはなかなかつながらないと思った。

▶プレゼンテーションについては、決められた内容は伝えることができたと思うが、質問に自らの言葉で答えるのが難しかった。①自分の班は外国人に関わる研究テーマなので、アメリカの高校生の意見を聞くことができたのは良い収穫となった。また、ホストバディーにプレゼンを褒められたのも自信がついた。③英語は「話す」のではなく、「伝える」ことが大切だというアドバイスも参考になり、良いプレゼンができたと思う。

▶授業やランチタイムのとき、アメリカの高校生はものすごいスピードで話して自分を主張するので、ついていくのが本当に大変でした。会話のタイミングがつかめなくて黙ってしまい、質問されるのを待って自分から話しかけることができなかったのが悔しいです。また、プリンストン高校に通っている日本人の子たちとも話せました。私より年下なのに現地のテンションで英語で盛り上がっているのを見て、③自分のコミュニケーション能力がどれだけ遅れているか思い知らされました。



▶プレゼンテーションを何度も繰り返して、一応はプリンストン高校の生徒に納得してもらえた。①私たちが推奨したエシカル消費は受け入れられたが、アメリカでは経済的に困窮している人の割合が日本よりも多いことや、治安がそれほど良くない地域も多いことから、善意に頼るような解決方法は限界があるように思う。新しい課題が見つかった。

(成果)

実際に生徒としてアメリカの高校の授業に参加することで日本との違いを感じ、グローバル社会で学んでいくために必要な資質を肌で感じ取ることができたといえる。またその気づきが日本での学校生活に活かされることが期待できる振り返りが多く見られた。また、課題研究においても同世代からの質問やアドバイスは大きな刺激になり、今後の取り組みの飛躍につながるものと期待できる。

③プリンストン大学（10／3（木）終日 プリンストン）

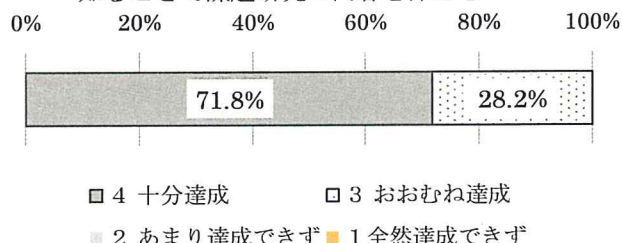
研修内容

- ・生徒各自の課題研究のプレゼンテーションを実施し、現地教員や学生の質疑を受け、議論を行う。
- ・全米で4番目に古く、2人の大統領を輩出している名門私立大学を訪問し、小グループに分かれ英語でのキャンパスツアーに参加し、米国の大学生活とはどのようなものかを質疑応答を通して学ぶ。

ねらい（期待される効果）

- ①米国の大学生のものの考え方や見方を知ること、課題研究の内容をグローバルな視点から汎用性を持つものへと改善できる。
- ②将来留学して学ぶために必要な心構えを学び、海外で研究することも視野に入れた自らの進路を、具体的に考える材料を得ることができる。

米国の大学生の考え方や見方を 知ること課題研究の内容を深める



（生徒感想文）

▶大学のキャンパスツアーを通し、②海外の大学への進学という手も十分にあり得ると知り、大学選びの選択肢や自分の視野そのものが広がったと思う。また、海外の大学へしたい際は、直接行くのではなく、一旦日本の大学へ進学してから、交換留学などの形で海外進学の方が効率的だと聞いたので、私が大学へ進んだ時には、そういった形もとりたかった。

▶プリンストン大学で学ぶ日本人の学生のお話を聞いて、②しっかりと目的をもって、プリンストン大学を選んだことや、自分のやりたいことを追及していることが分かりました。日本では、海外の大学への進学を選択肢に入れることは珍しいことだけど周りに流されずに自分のやりたいことのために世界に目を向けていたのはすごいと思います。②私も、大学選びだけに限らず、一般的に考えられている選択肢にとらわれずにほかの選択肢を自分で見つけ出していく人になりたいです。

▶大学生とのディスカッションは、この日の中で一番楽しかったです。①日本では知れないアメリカの現状やアメリカ人の感覚を知れ、私たちのプロジェクトがアメリカでも活用できそうだったということが分かってうれしかったです。



▶午後のプレゼンテーションでは、①研究の盲点を指摘してもらったり、改善点を教えてもらったりして、研究を深めることができました。

▶大学生へのプレゼンでは多くの質問をされ、何とかそれらに答えることはできたものの、返答能力を含む「質問力」の大切さを改めて実感した。これはプレゼン力の中にもあるので、今の自分たちにとっても大事なものだと思った。また、①それらの質問によって、自分たちの研究の課題、改善点が少しわかったので、これらを踏まえて、イサカでも、色々な情報を吸収したいと思った。

（成果）

海外の大学生とのコミュニケーションにより、海外進学への関心が高まったと同時に、課題研究に関しても活発な意見交換により新しい視点に気付くことができた。

④ホームステイ（10月2日-3日、4日-5日 プリンストン）

研修内容

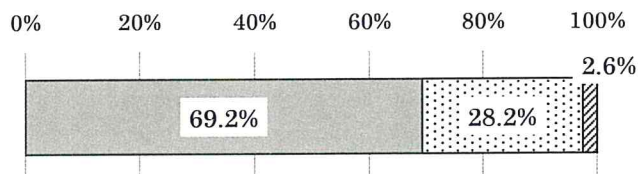
- ・アメリカの家庭において、家族の一員として家事などを手伝いながら英語でコミュニケーションを積極的にとる。
- ・アメリカの家庭で実際に過ごすことによって、文化の違いや生活様式を体験する。

ねらい（期待される効果）

- ①ホストファミリーの家族の一員として過ごすことで、アメリカの家庭生活を体験し、異文化理解を深める。
- ②課題研究のテーマについて、アメリカ人の考え方や見方を聞くことで、研究を深める。

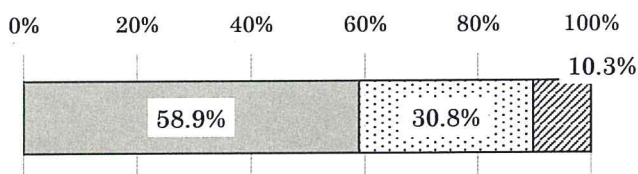


ホストファミリーの一員として過ごすことで、アメリカの家庭生活を体験し、異文化理解を深める



□ 4 十分達成 □ 3 おおむね達成 ▨ 2 あまり達成できず

課題研究のテーマについて、アメリカ人の考え方や見方を聞くことで、研究を深める



□ 4 十分達成 □ 3 おおむね達成 ▨ 2 あまり達成できず

（生徒感想文）

▶色々な人が話しかけてくれて、少しミスはあったけれど会話できて楽しかった。「会話をちゃんとしよう」と意識しすぎて会話自体を避けてしまうことが何度かあった。でも、①相手のことをちゃんと知ろうと思って自分なりに真摯に向き合えば、相手の話すことは自然と頭に入ってきたし、会話も自然にできた。

▶ホームステイが一番不安だったけどホストファミリーがとても優しく接してくださったので充実したものになった。パディとはサッカーのボードゲームやマリカーをして交流を深めた。①ファミリーには夕食で沢山質問をもらい、わたしもそれに質問し返す形で沢山会話をした。会話をするのはとても楽しいし、上手く表現できないこともあった。そういうときはとても悔しかったし、もっと英語が上手になりたいと思った。ホストファミリーは私の拙い英語を注意深く聞いてくださり、どうしても理解できないときは翻訳機を使って理解しようとしてくれた。二日目の夜は沢山お互いのことを知ることができたと思う。二日間見ず知らずの外国人の私を家族として受け入れてくれたファミリーには感謝しきれない。①ホームステイを初めてしてみて、外国の家庭で生の異文化を体験するのがとても楽しいことだと思った。将来もっと長くホームステイしてみたい。それまでに、もっと英語によるコミュニケーション力を上げるために沢山勉強しようと思う。

▶①ホストファミリーの方はイスラム教を信仰しており、女の子は外でヒジャブをつけていました。世界にはいろんな文化があり、考え方があるということを実際に感じる事ができ、二日間のホームステイで人生に対する価値観がとても変わりました。



▶①バディと話そうちに気づいたのがアメリカの高校生の政治意識の高さだ。自分がバディに対し、戯れに大統領についてどう思うかと話を振ったところ、非常に堂々とした態度でしっかりと意見を述べてくれた。①このような姿勢は日本の高校生にはなかなか見られるものではなく、衝撃的だった。

▶夕食が終わるとすぐ、ずっと自分の皿をもって立って、弟が洗う、姉が拭いて片付けるという役割分担がなされていて聞いてはいたけど、すごいなと思いました。手伝いたくてうろうろしていると“Would you like to help us?”と聞かれてしまって自分から言葉にするべきだったと激しく後悔しています。今後またきっとこんな機会があるからそのときはちゃんとしたいです。また、①家族の関係性が日本と違い、驚きました。会話は、“How was today?”から始まります。日本では、甘えや言わなくても伝わるという意識があるのか、ちゃんと目を合わせなかったり、返事をしなかったりするけど、アメリカでは独立した人として、しっかりとコミュニケーションをとります。会話を続ける難しさも実感しました。せっかく話を振ってもらっても、それを広げられなくて、何度も一往復で終わってしまいました。授業で英語を話すときや普通に日本語を話すときも質問したり情報を加えたりするのを心掛けて、コミュニケーション能力をつけていきたいです。



▶半日過ごして思ったことは、①自分がどう思うのかよく聞かれることだ。なんとなく、雰囲気に合わせて、というのは少ないように感じた。

▶②課題研究のテーマについて家庭では食べ残しをするのが当たり前と言っていて驚いた。確かに量はものすごく多かったが、当たり前のように残すのはよくないと思った。もしそれがアメリカ人の常識だとしたらどうにかしたいと思うけど、すごく解決は難しいと思う。

▶様々なアメリカの文化に触れることができた。②特に、アメリカの食生活についての知見が深まった。お店で出される食事は言わずもがな、一般家庭で作る料理の量もすさまじかった。アメリカでは料理を残す前提の量で作り、食べきれなかったら捨てるのが一般的らしい。その原因として、とても食べ物が安いことや1つあたりの食品の包装がとても大きいことなどが挙げられる。②アメリカの食に関する問題を解決しようと思ったら、企業に働きかけることが必須になると思う。しかし、彼ら自身も食べ物を捨てること自体は悪いことだと自覚しているらしく、日本人はお米1粒にも魂が宿っていると信じている、ということ話をするととても興味深いと答えてくれた。①お互いの良い文化をシェアするのがグローバル化ではないかと改めて感じた。

(成果)

ホームステイが初体験で不安を抱いていた生徒も多くいたようだが、ホストファミリーの温かさに支えられ、異文化理解とコミュニケーションを深めることができた。



⑤国連職員、ユニセフ職員によるレクチャー（10/4（金）午前 ニューヨーク）

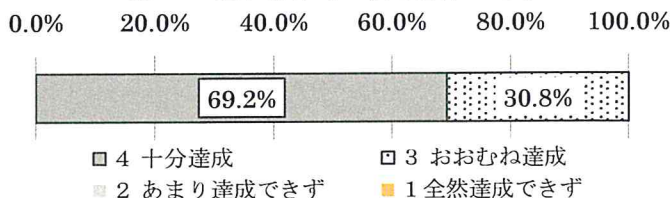
研修内容

・国連職員、ユニセフ職員から、現在の世界が抱えている諸問題について現状を話していただくとともに、国際社会としてどのように問題解決はかっているのか、国際問題の解決にあたり何が最も難しいことであるか等の講義を受ける。

ねらい（期待される効果）

①国際機関で実際にグローバル課題の解決に取り組んでいる方々から、その志に触れるとともに、問題解決の難しさについても学ぶ。
②質疑応答に積極的に加わり、議論を深めることができる。

実際にグローバル課題に取り組んでいる
方々の志に触れ、考えを深める。



（生徒感想文）

▶①人によってニーズが違うというのは、課題を解決していく中でとても大切なことだと感じました。国連の活動の災害援助だけでなくほかのどんなときにも当てはまることだと思うからです。何をだれがどれだけ必要としているかを、先入観にとらわれることなく考えられる人になりたいです。

▶お二人とも、①常に何かに挑戦していらっしゃり、志(それも崇高な志)を抱いていらっしゃるのが、印象的だった。今日講義していただいた内容は、お二人の今までの人生や経験についてが多くを占めていたと思うが、そういうことができるのは、今まで色々なことに挑戦し、沢山の経験をなさってきたからこそだと思った。

▶質問時間にすごく積極的でいい質問をするクラスメイトに驚き刺激を受けた。私は一番に質問しようと思っていたので手をあげたら、まわりの友達もみんな一斉に手を挙げていた。②クラスメイトの質問で講義がより深まっていき、興味深い内容がたくさん聞けた。



▶このユニセフでの体験で一番心に残ったのは、質疑応答です。聞いたお話がまだ頭の中でまとまっておらず、②しばらく手を挙げられなかった私に対して、他のほとんどのクラスメイトは最初からしっかりと挙手をしていました。その光景を見て、驚くとともに、少し恥ずかしさを感じました。話を聞くと同時にしっかりと頭を働かせていないと、良い質問は出てこないということを学びました。お二人のお話には、①課題研究をするうえでとても大事なことがたくさん詰まっていた。特に、困っている人それぞれのニーズが異なり、その一つ一つに寄り添うにはどうしたらいいのか、というお話がとても興味深かったです。自分の課題研究を通して誰を幸せにしたいのか、考えさせられました。また、常に現状で満足をしていない精神というものがお二人の根底にあったように感じました。次のステップを見据え続けるということはとても大変なことのようには思っていましたが、自分をよりよく変えるためには不可欠なことだと知りました。

（成果）

国際社会で働く経験の共有を通して、問題解決にあたるうえで大切な視点を学び、国際人の良きロールモデルとの出会いにより自分の生き方を深く考えることができた。

⑥コーネル大学での交流会（10/4（金）午後 イサカ コーネル大学）

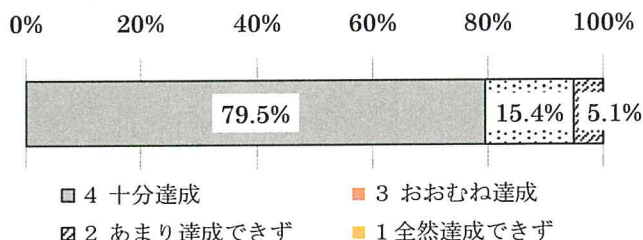
研修内容

- ・小グループに分かれ英語でのキャンパスツアーに参加し、米国の大学生活はどのようなものかを質疑応答を通して学ぶ。

ねらい（期待される効果）

- ①世界中から集まる米国の大学生の考え方や見方を知ること、異文化理解を深めるとともに、英語でのコミュニケーション能力を高める。
- ②海外で志を持って学ぶロールモデルに触れ、自らの進路決定のヒントとする。

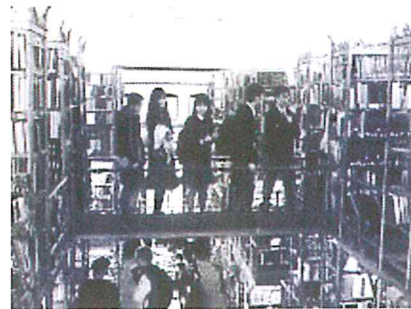
世界中から集まる米国の大学生の考え方や見方を知ること、異文化理解を深める



（生徒感想文）

▶今回ガイドをしてくださったコーネル大学で日本語を専攻して学んでいる学生さんの日本語がとても上手で、自分も負けじと、①数は少ないですが英語で質問をすることができました。この積極性は、今回の研修の成果が出始めているかなと感じています。

▶①日本の文化やアメリカでの生活についての情報を色々交換することで、外国での暮らしを少し身近に感じられた。アメリカで日本語を学ぶ学生は日本のアニメを字幕なしで見ると日本語を学んでいるという人が多いらしく、必要性を感じて勉強を始めることってとても素敵だなと思った。②無意識のうちに狭くしていた自分の進路の視野を広くしてもらったので、もっと自分の進路や将来のことを自由に考えてみようと思った。



▶ネイティブ側からしたら文法のミスや語順などは全く気にならないことだと学んだので、コーネル大学の学生と話ときは、①頭の中で文を組み立てるよりも先に思いついた単語を口から出すようにしました。そうすることで、学生たちの英語での会話のスピードについていけるようになったと思います。また、相槌なども口からすらすら出で来るようになって、会話のリズムが弾んだことで、とても仲良くなれました。英会話面で、自分の成長が感じられた日でした。

▶①私からコミュニケーションをとろうという姿勢を持ち続けて活動したいと思いました。質問と答えの一方通行だけで終わってしまう会話ではなく、そこから話を広げていけるコミュニケーションをつけて、相手を満足させられるようになりたいです。

▶プリンストンでも言っていたが、海外の大学で学ぶ日本人の学生が少ないのはコーネルでも同じで、②日本よりもっといろんな人が集まる海外で学ぶということは良い経験になるし、いろんな見方が身について良いと思った。

（成果）

学生と会話を重ねるごとに英語でのコミュニケーションに自信をつけ、海外への進学や生活への興味・関心が一層高まったと判断できる。

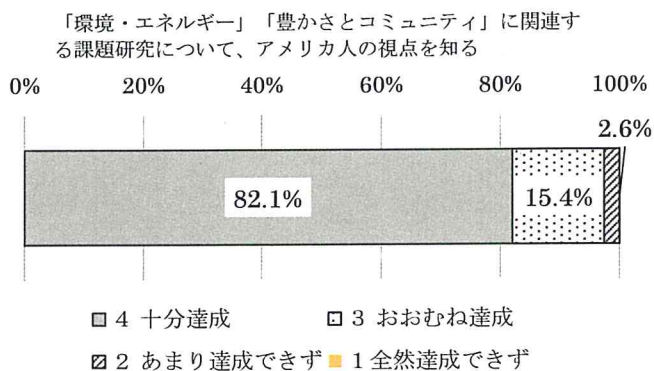
⑦エコヴィレッジ・イサカ （10/5（土）終日 イサカ）

研修内容

- ・自然と調和し、持続可能な生活を目指したコミュニティづくりを実践しているエコヴィレッジの住民と交流し、研究テーマについて意見交換を行う。

ねらい（期待される効果）

- ①本校テーマの「環境・エネルギー」「豊かさとコミュニティ」に関連する各グループの研究テーマを、アメリカ人の視点からとらえることで比較研究を深める。
- ②英語でのインタビューを通して、実践的な英語力を身につける。



（生徒感想文）

▶住人の方と英語でコミュニケーションをとることができて、
②少しずつ自分が英語を話せるようになっていっているのを実感できてうれしかった。プレゼンの際は、イサカの住人の方から①持続可能な社会にするためのたくさんの貴重なアイデアをもらうことができて、今後の研究の参考になった。



▶最後のプレゼンも成功し、新たな指摘や意見をもらえました。
①エコを推奨する人はたくさんいるけれど、実際に行動していない人ばかりなので、行動している人たちを見てお話を聞いたことは自分にとって良い経験になりました。

▶プレゼンでは、今までとは違い、もともと「エシカル消費」に興味があり、自身でも実践されている方に聞いてもらうことができた。①エシカル消費についての意見を聞かれて答えにつまづいてしまい、考えが足りていなかったのではないかと思います。私たちの研究を励ましてくれたし、良いアイデアももらえて、いちばんためになるプレゼンだった。



▶エコビレッジでは自分は農作業を体験したのだが、どれも手作業でしかできないものが多く、改めて食べ物の大変さを実感した。②今回昼食ではいつもより外国人とたくさん話すことができ、コミュニケーション能力は向上したと自分で感じる事ができた。①プレゼンでのアドバイスでは、そもそもの食べ残しの原因や外食産業の発展の原因など具体的な対策の前にその事柄の起源を知ろうとする姿勢が見られた。

（成果）

海外フィールドワークの最後の英語でのプレゼンで、これまでの経験を十分活かして堂々と発表し、積極的に意見を求める姿も見られ、議論を深めるスキルが確立した。

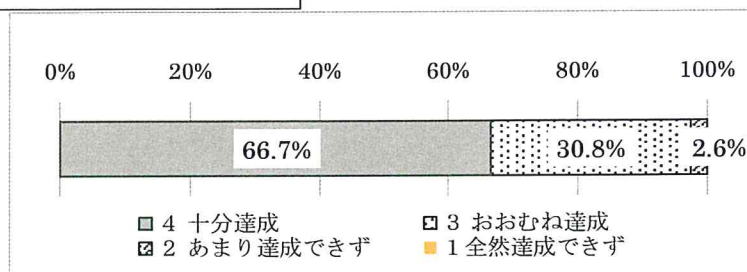
⑧研修全体を通して

研修のねらい

- ① 課題研究を深める 日本と海外の比較検証
- ② 実践的英語力の育成 英語での講義・質疑応答・プレゼンテーション
- ③ グローバルリーダーとしての資質涵養

視野を広げ多面的な視点・勇気を持ってチャレンジできるマインド

① 課題研究を深める



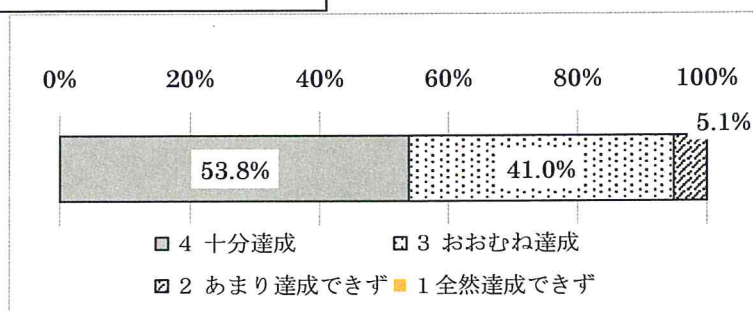
▶研究においては、私たちの研究は文化によってとらえ方が変わってくると思っていたので、いろいろな文化圏の方々からたくさんの意見やアイデアをいただけて、すごく参考になった。

▶課題研究の発表では、聞いてくれた人みんなが自分たちの考えを理解しようとしてくれ、考えに賛成したり、わかりにくい点などの指摘をしてくれたりとなんだか新たな視点を持つことの大切さを学びました。特に私は「ほかにどんなことを考えているのか」と聞かれたときに全然答えられず、自分の課題研究について、今の実験方法だけで精一杯になってしまい、その問題の本質を見直し、多面的な視点をもつことを忘れてしまっていたことに気づかされました。

▶現地の高校生や大学生の意見もとても興味深かったが、エコビレッジで伺った話はとてもクリエイティブで今後の研究に大いに役立つと思われる。やはり普段から食に気を遣っている方だったので、とても親身になって研究を助けてくれた。具体的には日本とアメリカのラベルにそれぞれかけているものを話し合いながら自分たちの案の改良策について話し合った。間違いなく日本人の視点からは気づけないような点を指摘していただいた。自分たちのテーマは外国人の方々が対象なのでとても有意義な交流だった。

▶グローバルな視点から自分たちが今まで考えたことのないような質問があったり、新しいアイデアをもらったりすることができたので良かったです。英語でのプレゼンは難しかったけれど、自分の成長や自身につながりました。

② 実践的英語力の育成



▶私は初めての海外を経験して、初めて必要になって使う英語を体験しました。そこで「伝えたい！」という気持ちはあるけど、自分の英語力（話す、聞く）や質問力の足りなさから、もっとしゃべりたいのに会話を弾ませられない悔しさを感じました。今後は、現地で気づかされたコミュニケーションの大切さを忘れずに、チャレンジ精神をもっていろんなことに挑戦したいと思います。

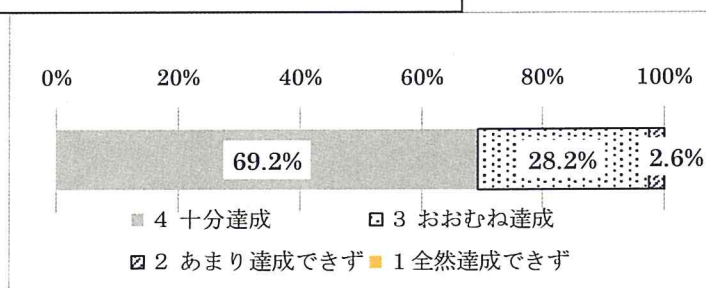


▶研修のはじまる前に、私は絶対にチャンス逃したくない、だからどの活動でも積極的に頑張ろうと思っていた。クラスメイトの雰囲気もあり、私は講義の質問時間には手を挙げて質問ができたし、ガイドの方に話しかけに行ったりすることもできた。でも、まだまだだと感じることもたくさんあった。積極性、コミュニケーションをとろうとすること、挑戦しようとする力、自分の頭や心で考えること。これらは、英語の発音なんか以上に大切で、付け焼刃では決して身につかない、人間性にかかわるところだ。これから常意識していきたいと思う。

▶この研修の中でたくさんの人と英語で交流したことでコミュニケーション力も付きました。特にコーネル大学では、時間を忘れるくらい話をするのが楽しくて、英語が話せるだけでなく積極的に“自分から”コミュニケーションをとることが大切だと思いました。思い返すと、ホストパディの子と満足できるくらいコミュニケーションをとることができたかというところというわけではないので、もっと積極的であるべきだったと少し後悔しています。これからまだまだ多くの人と研究について関わったり出会ったりすると思うので今回得られた力を存分に発揮できるようにしたいです。

▶今回の研修が間違いなく今までで一番実りのあるものになったと確信している。私がそう思った理由の一つは、自分の英語力に対する自分自身の信頼性の向上だ。日本で、英語で会話する際には、自分の伝えたいことが上手く相手に伝えられず、自分の英語コミュニケーション力に不安を感じていたのだが、実際米国に行き、現地の人々と会話してみると、意外と意思疎通ができ、むしろ日本より米国の方が上手く伝えられているのではないかと思ったほどだ。また、今まで培ってきた英語力も役立ったのは勿論なのだが、一番大切なのは、「伝えよう」という気持ちだということも改めて実感した。

③ グローバルリーダーとしての資質涵養



▶研修全体を通して、自分が今までどれだけ視野が狭かったかに気付いた。海外に目を向け、アメリカで活躍・勉強している日本人を見るたびに、様々な可能性を感じ、自分も挑戦したい気持ちになった。そのために、さらなるコミュニケーション力、英語力の向上を目指したいという意欲が沸いた。今後は、海外も含めて視野を広げ、今回の成長を機会にして自身のさらなる成長を目指し、課題研究、そして、自分の将来をより良いものにしたいと感じた。

▶由水さんが、自分に備わっているものを見限って、自分に限界を作るのではなく、自分が出せるベストを出していくのが大切だと、実体験の苦い思いを交えながら話してくれたのが、自分を前向きにしてくれたように感じる。由水さんが言っていたように、自分も新たなことにどんどんチャレンジしていき、自分の世界を広げていきたいと思う。

▶「多面的なものの見方の大切さ」を特に感じたのは、由水さんのワークショップです。私が今まで諦めてネガティブに思っていたことも、例えどんなに小さいことでも、「良いこと」として考えることができ、今までの自分の生き方について見直すきっかけとなりました。キラキラ輝く由水さんには、自分の夢を決して諦めないことの大切さを学び、その夢に向けて横着せずに、努力・挑戦するパワーをもらいました。

▶私はSGコースに入ってから様々なことに挑戦してきましたが、いつも「あと一步」が踏み出せず歯がゆい思いをしていました。とくに、夏休みの留学先でのディスカッションでは、一度きつく反論されて以降自分の意見を主張することに怯えてしまい、せっかくの機会を無駄にしてしまったことを後悔し続けていました。それと同時に海外研修でリベンジしたいという思いが強まりました。そうした強い意志を持って研修に挑んだ結果、「あと一步」を踏み出し、自分の中の壁を越えたような感覚を味わうことができました。思い返せば困難もたくさんあります。例えば、ホストファミリーと雑談している途中、自分の言いたいことがうまく伝わらず、話題を変えようか迷った場面がありました。しかし、そのとき私は「ここで話題を変えれば『あと一步』を踏み出すことはできない」と自分に言い聞かせ、ジェスチャーや言い換えで工夫して相手に思いを伝えました。苦労はしたけれど、そのときの「壁」を越えた快感は忘れられません。そういう小さな挑戦を何度も繰り返すうちに、「あと一步」への抵抗がなくなり、今までの悔しさを晴らせたと胸を張って言えるほど意義深い研修になりました。そして仲間たちの勇姿を間近で見たことも、「あと一步」への原動力になったと思います。質疑応答の際の挙手の多さはもちろん、様々なアクティビティの途中でも、文化や言葉の違いを恐れず積極的にコミュニケーションを図る仲間がたくさんいました。自分に刺激を与えてくれる仲間がいる私は本当に幸運だし、これからは私が周りに「あと一步」を踏み出させるような存在になりたいと感じました。

▶課題研究の発表では、日本語でも英語でも相手に伝えることの難しさを感じ、悔しいこともたくさんありました。しかし、いろんな場所でいただいたアドバイスを生かしながら何度もチャレンジするたびに、自然と笑顔で胸を張って話すことができるようになりました。どんどん変わっていく自分を感じたり、仲間の成長をみんなと分かち合うことができたととてもうれしかったです。また研究を聞いてくれた方から、いろんなアイデアをたくさんいただき、自分もその方たちのようにしっかりと意見を言えるようコミュニケーション力や経験をもっと積んでいきたいと思いました。そして今回、実際に自分の英語力をためすチャンスが多くあり、英語を通して今までよりもたくさんの人とつながることができました。母国の言葉だけでなくほかの国の言葉を学ぶことで、自分の世界が広がっていくことを本当に実感しました。

(成果)

課題研究のフィールドワークとして位置付けている海外研修では、自分達の研究を多面的に捉え直すきっかけとなっただけではなく、異なる価値観や文化的背景からの視座を獲得できたようである。また、様々な人々との出会いやコミュニケーションにより、生徒たちの視野は格段に広がり、失敗を恐れずに挑戦をしようとするマインドセットを身につけることができたことは、生徒たちの今後の活躍に大きな意味をもつものと考えられる。



第4節 「SG探究」

【特別プログラム】(H) 課題研究中間発表

1. 実施概要

○目的：各グループで進める課題研究について、これまでのリサーチを整理し考察した内容を発表することを通して研究をかためるとともに、大学院生からの助言をもとに修正すべき課題を明らかにする。

○日時：令和元年11月20日（水）6・7限

○場所：本校生徒ホール

○対象：2年SGコース41名

○内容：金沢大学の大学院生に対して、各グループ（8グループ）がそれぞれのブースで発表し、その内容について、質疑応答やコメントをいただく。研究における調査や考察の妥当性、資料の作成方法など、大学院生の知見や視点から、研究についての助言を得て、課題研究の深化をはかる一助とする。



2. 生徒の感想

▶今日は今までで1番鋭い指摘を受けました。仮説を根本から覆すような指摘もあり、正直戸惑いもありましたが、研究を冷静に見つめ直すきっかけとなり、私たちの班にとって確実にプラスに働いたと思います。それと同時に大学院生の知識の豊富さ、論理的思考力の高さに驚きました。

▶データの正しさや主張の根拠についてかなり厳しめの意見を頂いた。特に印象的だったのはアンケートの質問が抽象的だと言われたことだ。抽象的質問では捉え方によって意味が変わってしまうと言われ、そのとおりだと思った。

▶まず大学院生の物の考え方に驚かされた。数年後の自分のなりたい理想像がまた1つ増え、モチベーションが上がった。加えて、様々な穴と改善策を提示してくださったゆえ、これを採用してよりよいものを作り上げていきたい。

▶自分たちの研究の脆い部分をつかれて、それが砕け散ったという感じがした。大学院生の方々の知識・経験の豊かさに何度も驚かされ、自分のビジョンの理想像のようなものも形成された気がする。



3. 成果

研究を進めていく中で、第三者から助言を得ることで冷静にそのロジックの適切さや問題点を確認することができることを再確認できた。今回の中間発表でも、生徒同士では気づかなかつたり、曖昧にしてきた問題点を鋭く突きつけられ、研究の再構築の必要性を感じる機会となったようである。また、研究者のロールモデルとの出会いともなったことは、生徒の感想からもうかがえる。

第4節 「SG探究」

【特別プログラム】(I) 北アジアCAPE大学生との交流

1. 実施概要

○目的：北アジアCAPE2019年度石川 Japanese Studies Program 参加学生との交流し、課題研究の成果を英語で発表することで英語プレゼンテーション能力を高めると同時に、海外の大学生の助言を得ることとで研究を深める。

○場所：生徒ホール

○日付：令和元年11月27日（水） 13:35～15:15

○内容： 13:35～13:50 アイスブレイク
13:50～14:10 写真を使った文化学習（日本語）
14:10～14:30 課題研究プレゼン（英語）+Q&A ①（20分）
14:30～14:45 自由交流・休憩
14:45～15:05 課題研究プレゼン（英語）+Q&A ②（20分）
15:05～15:15 泉丘生代表、CAPE代表挨拶 写真撮影

2. 生徒の感想

▶今回のプレゼンテーションは英語だったので、私は原稿に頼らず、発表、質疑応答できることを意識しました。また、話し合う場面では多くの意見をもらえるよう、自分から聞くことを意識しました。発表では、自分の言葉で話すことができましたと思います。自分たちから質問していくことも良く出来たと思います。今後はさらに英語力を磨いて、より深い話し合いができるようにしたいと思います。

▶発表ではアメリカで発表した経験がしっかり身についていることを実感できた。アイコンタクトや間の取り方、速さなど以前は1つ1つ意識しないと出来なかったことが自然にできるようになっていて嬉しかった。



▶プレゼンテーションでは事前の準備ではうまく話せず心配だったけど本番は上手く話せたので良かった。留学生からの質問には積極的に答えられた。これからはもっと効果的に伝えられるようにプレゼンテーションをレベルアップさせていきたい。

▶自分たちの研究は日本の現状に基づいたものになっているので、ニュージーランドでは今、レジ袋・マイバッグがどれくらい使われているのかということを知ることが出来ました。今の他の国での状況やどんな対策が行われているか、もっと調べてみるが必要だと思いました。



3. 成果

エンパワメントや海外研修での経験の積み重ねもあり、英語でのプレゼンテーションへの抵抗はずいぶんと少なくなっていたようである。確実にコミュニケーションスキルは向上しており、今回の企画を通して、さらに自信を高めることができたようである。課題研究の内容を英語で深めていくことへの意識が一層高まった交流会となった。

第4節 「SG探究」

【特別プログラム】(J) 全国高校生フォーラム

1. 実施概要

○目的：日頃の学習や課題研究の成果をポスターセッションで英語を用いて発表し、広く普及する場とするとともに、他の発表に触れてグローバルな社会課題に対する見識を深め、お互いに刺激を受ける場として活用する。また、交流会ではテーマ別のディスカッションを通して、グローバルな社会問題について英語で議論する力や積極性を養う。

○主催：文部科学省、国立大学法人筑波大学

○日時：令和元年12月22日（日）

○会場：東京国際フォーラム

○参加者：SGコース生2名 架谷ひなた・山田萌恵子

「An Interactive Disaster Prevention Manual」

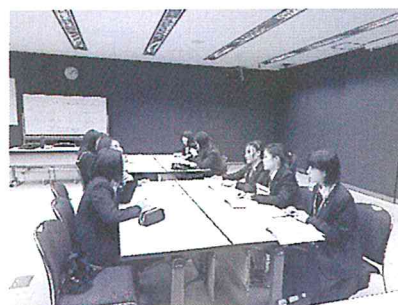
2. 生徒の感想

▶やはりレベルが同年代と思えないほど高く、堂々と発表・ディスカッションをしている人ばかりでした。今回、このようなレベルの高いフォーラムに自分も参加できたということが、自分の可能性を感じるきっかけになりました。これまでグローバルリーダーと言われても、自分が本当に世界的に活躍できる人材になることは想像できませんでした。でも、本当に将来日本を引っ張っていきそうな同年代の人たちが同じ会場にたくさんいるのを見て、自分にもチャンスはあるのではないかと思いました。また、強い憧れを持ちました。そして閉会式の時、“You are the future”と言われたのがすごく心に残りました。今後は、自分の将来に対してもっと広い視野を持ちたいと思います。



▶他の学校の人、英語で自分の思いや考えを思う存分伝えている姿を見て、とても刺激を受けました。私は流暢に英語を話すことはできなかったけれど、積極的に自分の考えを自分の言葉で伝えることができたので良かったです。

ディスカッションが一番の不安要因でしたが、和やかな雰囲気、とても話しやすかったです。他の学校の人、英語力にはもちろん驚きましたが、思考力の高さにも驚きました。曖昧とした社会問題を私たちの日常生活に落とし込むのが上手いなと思いました。普段から社会に関心があるからだろうなと思います。ディスカッションでは話が途切れず、各々が自分の意見を伝えていました。その中で、私も自分の思いを伝えることができて良かったです。



3. 成果

探究的な学習における全国の先進校が一堂に会するこのポスターセッションとディスカッションに参加して、生徒たちは他校の生徒の活躍に刺激を受けていたようである。同年代でありながら、様々な社会課題に対する見識の高さや、英語のレベルの高さに触れることで、学びに対する意欲が高まったのは間違いない。また、改めてグローバルリーダーとなって社会をより良いものに変えていく志を固める機会となった。代表として参加した生徒には、この経験を他の生徒に伝えていく役割を果たしてくれるものと期待する。

第4節 「SG探究」

【特別プログラム】(K) 四校合同課題研究発表会

1. 実施概要

- 目的：各学校において進めてきた課題研究の成果を相互に発表することで、表現力を磨くとともに、同世代同士の意見交換を通じ、生徒のさらなる成長を促す。また、各学校における探究活動について、広く発信する。
- 参加者：本校生徒SGコース40名、普通コース10名
金沢大学附属高校、金沢二水高校、金沢西高校の代表生徒
- 日時：令和2年1月11日（土） 9:30～12:00
- 場所：金沢大学附属高校 体育館
- 内容：各校で実施している課題研究のポスターセッション

2. 生徒の感想

- ▶他校の生徒達の研究テーマは、型にはまらないユニークなものが多いという印象を受けました。研究内容や仮説も独自性があり、かつ実現可能性が高く、見応えがありました。それと同時に、他校の生徒、先生方の核心をついた質問を通して、客観的な視点から自分たちの研究を見直すことができました。
- ▶社会問題の解決のために共に頑張る同志の研究や意見を聞いていく中で、一人でも多くの方のために課題を解決したいという想いがさらに深まりました。
- ▶見ていただいた人からのアンケート結果を見て、私たちの研究には課題解決力、つまり、結論が聴いている人からしてまだ納得しづらいと言うことに気がつきました。
- ▶附属高校の発表を見て、頭の中のアイデアをアイデアで終わらせず、実行している点が素晴らしいと思いました。特に1年生は企業とも連携して研究に取り組んでおり、行動力の高さを感じました。
- ▶自分の班の発表については、自分達の考え方や視点に他校の生徒から賛同をいただくことができ達成感を感じた。他校の生徒からの質問には、自分達が課題と感じていたことをやはり指摘されると同時に、それに関して意見を得ることができ、充実した時間となり、この課題をどう解決していくか考えようという意欲がさらに湧いた。

3. 成果

本校ではこの発表会を、研究発表会に向けてのリハーサルという位置づけで取り組ませたが、同じ年代の他校生への発表は予想以上に刺激的なものとなったようである。特に、他校の発表において研究を実践につなげているものがあることを知ること、自分たちの中に生まれていた閉塞感を打破するきっかけをつかんだ生徒も多かったようである。このような学校を超えた交流の場は、生徒を大きく成長させる機会となるということを確信できた。



第4節「SG探究」

【特別プログラム】(L) 研究発表会

1. 実施概要

○目的: S G Hの研究開発の実践報告及び生徒課題研究発表等を行うことにより、その成果を広く校内外で共有するとともに、助言や意見交換を通して、さらに研究を深める。

○対象: 本校S G コース生徒・理数科生徒、県内外の教育関係者、A L T、大学教員、大学院留学生等

○日時: 令和2年1月24日(金) 9:25～15:50

○会場: 本校啓泉講堂・理科講義室ほか



○日程

時 限	S S H	S G H	
2 限 9:25～10:15	普通科普通コース2年生生理型 「S S 課題研究Ⅰ」 2 F 生物実験室 3 F 化学実験室 4 F 物理実験室 4 F 物理第2講義室	普通科1年生 「S G 思考基礎」 5 F 理科講義室 地学実験室	普通科1年生 「グローバル・イングリッシュ」 (2 F 視聴覚室)
3 限 10:25～11:15			普通科普通コース2年生 「リーディング・スキル」 (2 F 視聴覚室)
4 限 11:25～12:05	S S H (理数科2年生) × S G H (普通科S G コース2年生) 「口頭発表会」 (1 F 啓泉講堂)		
昼食		12:20～12:50 S G H研究協議会 (2 F 視聴覚室)	
5、6 限 13:00～15:00	「課題研究ポスター発表会」 S S H「AⅠ課題研究Ⅱ」／S G H「S G 探究」 (理数科2年生) (普通科S G コース2年生) (1 F 啓泉講堂)		
7 限 15:20～15:00	15:20～16:00 S S H研究協議会 (2 F 中講義室)	15:20～16:00 S G H運営指導委員会 (2 F 視聴覚室)	

○参加者

県内高校	県外高校	大学・大学院	教育委員会	その他(保護者等)	合計
23	12	16	18	33	102

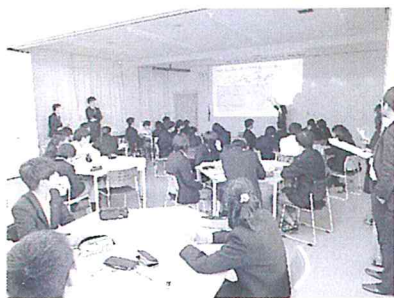
○ポスター発表テーマ

A	NO PLASTIC BAGS	B	災害時高校生にできること
C	NO MORE LEFTOVER	D	エシカル消費 ～地球に優しい消費はじめませんか
E	クイズ式防災マニュアルのすゝめ ～地震大国日本に住む外国人へ	F	新しい分別 ～リサイクルプラスチック
G	浅野川ポイ捨てバスターズ	H	新しい時代に新しいラベルを

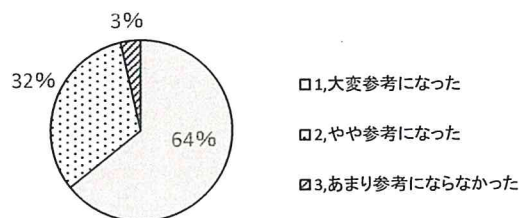
2. 参観者のアンケートおよび感想

【SG思考基礎】

- ▶教科をまたいだ授業や、身近なものを題材とした授業など生徒の興味をひく仕掛けがとても参考になりました。
- ▶生徒に問題意識を持たせることに重点を置かれていると思いました。



「SG思考基礎」は参考になったか



【グローバル・イングリッシュ】【リーディング・スキルズ】

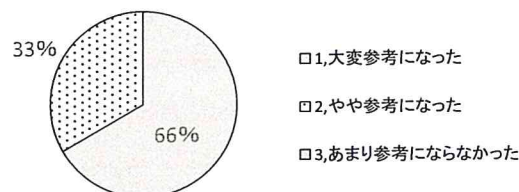
- ▶生徒の英語を堂々と話す姿に感激しました。
- ▶先生の軽快なトークから始まり、リスニング、リーディング、スピーキング・ライティングの4技能を高める素晴らしい授業でした。生徒たちも必死で取り組まないといけないので意欲的に活動していて良かったです。
- ▶効果的なディベートの方法を学びました。授業で選択されていた教材参考にいたします。



「グローバルイングリッシュ」は参考になったか



「リーディングスキルズ」は参考になったか



【SSH×SGH口頭発表会】【SGHポスター発表】

▶発表の仕方もよかったが、生徒の質疑応答のレベルが高くて、そこも含めていい発表になっていたと思います。

▶生徒が自分たちで動くだけでなく、先生方が適切なサポートをなさっているのが感じられました。

▶悩みながら研究を進めてきた様子もあったが、しっかりと課題を設定し、研究に臨んでいたことが伝わった、よい発表であった。

▶質疑応答が活発であった。授業の中でそのような指導が入るのが気になった。

▶生徒間の質問力はすごいと感じた。その部分に対しての働きかけを知りたいと思った。

▶コメントや質問が活発なのがとても素晴らしいと思いました。しかし、質問を受けている生徒がメモを取っておらず、せっかくのコメントや質問が「しただけ」になってしまっているのはもったいないと思いました。ぜひメモを取るなりして、今後の研究に活かしてほしいです。

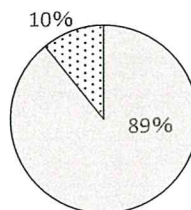
▶泉丘高校生が課題解決（提案にとどまらず）に向けても動き出されたことに感動しました。

▶外部の機関に調査・インタビューに出向いているチームが多くて、その点で積極的に研究しようという態度を感じました。

▶生徒が実際に動いている姿があり、絵空事な提案ではなかったことが素晴らしかった。しかし、仮説の部分でずれていて進んでいなかったグループもあったので、もっとこの前の場面でフィールドワークがあったらもっと良くなったと思い、少し残念だった。

▶たくさんのデータをとったり、企業に働きかけたり、社会に出て様々な視点で調査、研究されていて素晴らしかったです。

「SSH×SGH口頭発表会」は参考になったか

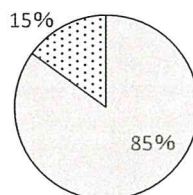


□1, 大変参考になった

□2, やや参考になった

□3, あまり参考にならなかった

「SGHポスター発表」は参考になったか



□1, 大変参考になった

□2, やや参考になった

□3, あまり参考にならなかった



【SGH協議会】（18名参加）

▶先生方の悩み、苦しみ、やりがいがたくさん伺えてよかったです。

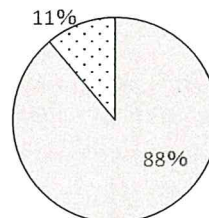
▶生徒を熱中させるための仕掛けがたくさんあり、またデータ決め、グループ決めに丁寧になされているのが良いと思いました。

▶先生方は考えることがたくさんあり大変さが伝わりました。教育の評価という観点で生徒にどういった影響を与えたいかという目標に明確にすることが大切だと感じました。

▶先生たちのモチベーションはどのように維持されているのか（なぜ、あの様に高いのか）も気になった。全国への普及を目指す際に泉丘高校でされてきたことを、一つのノウハウとして蓄積していくことの大切さを感じた。

▶SGHのプログラムを運営された先生方の考え方がよく分かった。また実際の生徒の変化がグラフ化されていることに説得力があった。

「SGH協議会」は参考になったか



□1, 大変参考になった

□2, やや参考になった

□3, あまり参考にならなかった

3. 生徒の感想

▶今までしてきた発表の中で最も緊張した発表だったけど、プレゼンテーションをするにあたって大事な姿勢、話し方などを意識してすることができた。参加者からは今まで出てこなかったような鋭い質問が飛んできて戸惑ったこともあったが、臨機応変に回答でき、質疑応答のスキルが上がったことを実感できた。

▶今回の発表の準備のために、班の仲間と2週間前から毎日放課後残って話し合いを重ねたことで自分たちの班の研究をより深める事ができ、仲が深まったように思う。この経験とそれにより得た自信を忘れずこれから社会を変えるための挑戦を続けていきたい。

▶課題研究を始めてから、第三者の意見を聞くことの貴重さを実感しています。特に今日は、外部の方から、今後の参考になるようなコメントを沢山頂きました。仮説を根本から揺るがすような指摘を受けたときは軽くショックを受けたのですが、それも良い研究を仕上げるための試練だと思って頑張ります。

▶研究の内容においても、発表の表現力においても改善すべき点が多く見つかりました。以前はそこで失敗したと落ち込んでいましたが、今は次はどうしいいのかと、見つかった反省点をもとに前向きに捉えられるようになりました。これまで何度も壁にぶつかって諦めかけましたが、その度に自分が頑張ることで誰か一人でも救えるかもしれないと思い、そして同じ熱意をもった仲間を支えられて、この合同発表会までたどり着くことができました。

▶今まで色々な場所で発表を積み重ねてきて力がついたんだなと実感しました。様々な質問を受けて、新たな私たちの課題を発見しました。指摘やアドバイスをもとに今後の研究に活かしていきたいと思います。

▶以前よりも聞き手の分かりやすさを意識するようになりました。スライドや話す言葉への考え方が変わったと思います。

▶大人からの視点や理数科からの視点は私たちの研究を全く異なるところから見たもので、研究をもっと論理的にもっと魅力的にするには重要なことだなと思うものばかりでした。発表の前は、私たちの研究はこんなものだろうと思っていましたが、今回の発表で、もっと調査をして班のメンバーで話し合わなければいけないことがあるなと感じました。



4. 成果

5年目を迎えた研究開発成果の発信として、生徒の課題研究発表を中心に、今年度は特に普通コースでの取り組みについても公開した。それは、SGコースでの実験的な取り組みを学校全体に波及させるという本校のモデルについて見ていただくことを重視したからである。また、SG思考基礎では、次年度以降のプログラムの改善を視野に新しい試みにも挑戦した。

生徒の課題研究については、この発表会自体がゴールというより7月の成果発表会に向けての中間発表としての意味が強くなってきたため、生徒はこの場も貴重な学びの機会と考え、前向きに取り組んでいる姿が見られるようになった。

第4節 「SG探究」

【特別プログラム】(M) 振り返りのためのワークショップ

1. 実施概要

○目的：1年間の課題研究を通しての自己評価を他者の視点も交えながら行うことで、メタ認知を深めるとともに、この先半年間の研究の継続に向けてグループとしての意思統一をはかる。

○日時：令和2年2月8日（土）

○会場：理科講義室（iStudio）

○講師：尾張 由紀也氏（自生塾）

○対象：SGコース生41名

○内容：①「タックスマンモデル」「ジョハリの窓」の紹介と心理的安全性の講義

②チームとしての振り返り・個人としての振り返り

③内省からフィードバックへ

④チームとしての目標設定と共有・個人としての目標設定



2. 生徒の感想

▶今回のセッションを行う前は、自分の気持ちを正直にぶつけすぎるのは逆にチームの連帯感をだめにしてしまうことだと考えていた面がどこかにあったけど、やはりいいチームは失敗や欠点を共有し合うことで改善できる環境が作れていることが分かった。この活動の振り返りの時、班員みんながすすきりした、ということをやっていたので、みんなにとってメリットがあったいい時間だったと思う。特に、班員に自分の今までの振り返りとメッセージを伝えた時、班員への感謝が改めて深まったと同時に、自分がどういう立場で求められていて、どんな場面で活躍できるのかを教えてもらうことができたと思う。この活動のおかげで、これまでよりもいい役割分担ができそうだった。

▶正直、この授業を受ける前は憂鬱な気分でした。どうせ普段のように会話が盛り上がらず、考えを上手く伝えられないまま終わるだろうと思ったからです。しかし、それは完全に杞憂でした。班の短所を出すとき、班全員が「会話量が足りない」そして「この状況を打開したい」と言ったのをきっかけに、少しずつ本心を曝け出せる雰囲気が出来ていったのです。それに乗っかるように、私もいつの間にか本音を口にしていました。いつもは言えない班員への感謝も、何故か今日は面と向かって言えました。皆も私のことを班の一員として認めてくれている事が分かりました。それだけで数倍、居心地の良さを感じました。



3. 成果

グループでの課題研究を通して、様々な資質や能力を身につけることを求めているが、今年度は毎回最後の5分間を振り返りの時間として設定してきた。ただ、内省だけでは気づかない自らの強みや改善すべき点を相互評価を通して認識させることが、今回の大きな目的であった。場合によっては痛みを伴いかねない他者からの評価も、心理的安全性に留意しながら行えたことで、自己肯定感が高まり、自己の成長に向けて取り組む意欲につながったようである。メタ認知を深める方法として大変有効であった。